
セミナー 子どもの精神分析的心理療法

こころのケアに生かす理論と実践

木部則雄，平井正三編著
鶴飼奈津子，黒崎充勇，飛谷 渉，
脇谷順子，松本拓真，吉沢伸一著

岩崎学術出版社，A5判 328頁，5,280円，2024年11月刊

(京都ヘルメス研究所・京都大学名誉教授) 山中康裕

本書は，京都府立医科大学出身の精神科医で，現在，白百合女子大学発達心理学教授の木部則雄氏と，京都大学大学院教育学研究科出身で，現在，大阪経済大学大学院人間科学研究科客員教授の平井正三氏の監修で，上記6人の執筆者を交えた，日本精神分析学会の2015年から2018年の4年間にわたる教育研修セミナーから纏めた記録である。二人の編者はいずれも，イギリスのタヴィストックに留学経験のある児童・青年心理療法の専門家で，著者の内最初の4人も精神科医ないしは，タヴィストック出身の心理の専門家たちであり，最後の二人も心理出身の精神分析の専門家であって，いわば児童・青年精神分析的治療の，理論と実践の啓蒙的な教科書であると言っていいだろう。

編者らは，ポスト・クライン派つまり，ビオンやウィニコットやアルヴァレスらの，現在のイギリスでは主流の児童・青年の心理療法家であって，先の著者4人の事例報告に関して，いくつかの例の子どもや親たちの言動に対して，実に適切・的確な議論がなされていて，しかも，編者および討論者の討論と，事例報告者の対論とが丁寧に記録され，しかも，各章には，さらにご丁寧に何冊かの参考書が掲げられていて，これを読む読者は，実際にこのセミナーに参加している気分になり，これから子どもたちの精神分析的な精神療法にかかわる人たちにとって，実に格好の手引きとなるだろう。ここでは，印象的な黒崎の一例のみ取り上げるが，事例は小学低学年の女兒で，「言葉の遅れ・汚れについての敏感さ・痼癢・ストレスがたまると発熱する」などで来談した子どもである。ハイテンションで描いた描画で，ハートのたくさんついた一見幸せな犬や星やお花たち・虹

が架かり，子どもたちが楽しそうにしている。しかし，屋根は黄緑，人の顔は紫，外にいる両親は青い顔だけで，宇宙人のよう。「うちの中では幸せいっぱいであってほしいのに」とセラピストが介入すると軽くなずくが，「外に出ると気を遣って疲れるのかな？」という問いに，首を振って否定する。3回目の描画で色鉛筆で恐竜を描き，2枚目に緑恐竜と赤恐竜が合体した絵を描いたのに「父母が合体したら，町が平和になる？」というところ，トイレに立つ……。この〈トイレに立つ〉について，象徴化としての表現手段というよりも排出手段となっているのではという解釈が提案され，議論は白熱する……といった具合である。精神分析的なセラピーの実際が，手に取るように描かれ，きめ細かい議論が続いていて，とてもよく理解でき，一読に値する。
